

## アジア・太平洋戦争下の雑誌『国民保育』 — その書誌と誌面の内容的変遷 —

### On the Bibliographic Data and Changes to Editorial Policy in the Monthly Magazine *Kokumin Hoiku*: 1941-1943

浅野 俊和  
Toshikazu ASANO

抄録：本稿は、アジア・太平洋戦争下の雑誌『国民保育』について、その書誌を押さえるとともに、創刊から終刊に至るまでの誌面構成や主だった論調の変化をたどることで、歴史に埋もれていた同誌の輪郭を描き出すものである。同誌の誌面内容の変遷は、4つの時期に分けてとらえることができる。すなわち、1)「保姆の教養雑誌」としての時期／1941(昭和16)年1月から同年7月まで、2)「国策保育雑誌」としての時期／1941年8月から1942(昭和17)年4月まで、3)「母と先生の雑誌」としての時期／1942年5月から1943(昭和18)年1月まで、4)再び「保姆の教養雑誌」としての時期／1943年2月から同年7月までである。

キーワード：国民保育協会、フレーベル館(日本保育館)、総力戦体制

#### はじめに

1930年代末から1940年代前半にかけての時期、いわゆる「総力戦体制」下に発行されていた保育雑誌としては、『幼児の教育』誌(「日本幼稚園協会」発行)と『保育』(「全日本保育聯盟」発行)、『愛育』(「恩賜財団愛育会」発行)があったとされる。アジア・太平洋戦争末期の資料不足などによる休刊は見られるものの、それら3つは戦前から戦後にかけて発行された伝統的な雑誌であり、編集・発行団体の権威とも相俟って、各誌の記事内容が戦時下における保育界の状況を語るものだと見なされてきた<sup>1)</sup>。

しかし、そうした主要誌の陰に隠れるような形で、1つの保育雑誌が1941(昭和16)年1月に創刊され、1943(昭和18)年7月における『保育』誌への統合で終刊を迎えていたことは知られていない。その雑誌は『国民保育』と名づけられており、「国民保育協会」による編輯のもと、2年半余りの間に休刊を挟むこともなく全31号が発行された。

同誌については、管見による限り、保育・幼児教育史の各種著作を紐解いても言及は見られず、先行研究も一部記事を用いた拙稿だけの状況であることから、極めてマイナーな存在となっている<sup>2)</sup>。とはいえ、その発行元(「国民保育協会」の母体)は保育業界の老舗企業となるフレーベル館(1941年11月から1946(昭和21)年1月までは「日本保育館」と社名変更)であり、同社の絵雑誌

『キンダーブック』に並ぶ定期刊行物として見た場合、必ずしも単なるマイナー雑誌だとは片づけられまい。ただ、主要3誌と違い、同誌は国立国会図書館に1冊も所蔵されておらず、他の所蔵施設はわずか数館で相互に欠落が見られ、所在がわからない号も2冊ある。しかも、発行元であったフレーベル館は、渡邊紫郎実編『フレーベル館七十年史』(フレーベル館、1977年)の数ヶ所で誌名などを記しているものの、関係史料はおろか原本の保存すらしていないという。そのように現存する原本自体が極めて少なく、全号通しでの閲読は容易にできず、人々の目にもほとんど触れてこなかったことからすれば、同誌は名実ともに“幻の保育雑誌”だと言えよう。

そうした稀覯雑誌『国民保育』とは、いったい、どのようなものだったのか。その問いに答えることは、2つの条件に縛られるため、必ずしも容易ではない。すなわち、1つは、前述したように原本や関係史料がほとんど残っておらず、全31号の通読による内容把握が困難であること、もう1つは、「戦争協力」の問題などと関わって思想的な評価が難しく、非常に扱いにくい時期の雑誌だということである。

前者の条件については、戦災によって散逸・焼失したり、戦後処理の過程で廃棄処分されたりしたことに加え、雑誌が持つ消耗品的な性質も大きな影響を及ぼしている。この問題はいわば歴史研究における宿命であり、多寡はあれ現前の断片的な史料に基づく検討を通した検証、いわゆる試論を絶えず積み重ねていくしかない。一

方の後者に関しては、日本近代史家の加藤陽子によれば、「歴史家の仕事は、後世からみて正気の沙汰とは思えないことが、当時渦中にあった当事者にとっては正気の沙汰に思えた、その理由と背景を内在的に問おうとするところから始まる」ものであって、まずは当時の実態へ真摯に向き合う姿勢こそが大切なのだという<sup>3)</sup>。それは、思想先行の解釈に陥ることなく、史料に刻まれた痕跡を虚心坦懐な態度でたどり、その歴史的事実をより正確な形で復元しなければならないという姿勢である。

以下、本稿では、そうした問題意識に基づき、『国民保育』誌の書誌を押さえるとともに、創刊から終刊に至るまでの誌面構成や主だった論調の変化をたどることで、歴史に埋もれていた同誌の輪郭を描き出したい。なお、雑誌という史料の性格上、誌面では複数の執筆者が多様な立場で持論を展開しており、それらすべてを整理した上での傾向把握は非常に難しいところがある。また、前述したように所蔵先不明の号も見られるため、同誌全号の通読は未だできておらず、全体像を把握している状態だとは言いきれない。ここでは、紙幅を考慮し、巻頭言・巻頭論文・編輯後記など、各号での主張が集約された記事だと見なされる部分の論調にあえて焦点を絞り、その内容的な変遷を追うこととする。そうしたことから、とりわけ時期区分に関しては試論的なものとならざるを得ない。

## I. 雑誌『国民保育』の書誌

### (1) その発行状況と体裁

『国民保育』誌は、どのような雑誌であったのか。それについては、まず同誌の基礎データとなる書誌を押さえておく必要がある。ここでは、その発行状況・体裁、編輯団体・発行元という2つの側面から整理をしてみたい。

最初に、発行状況・体裁である。雑誌『国民保育』は、第1巻第1号(創刊号)が1941年1月20日付(奥付による、以下同様)で出され、1943年7月11日付の第3巻第7号(通巻31号)まで毎月発行されていた。そのため、創刊から終刊に至るまで休号はない。ただ、同誌の各号や出版界の諸史料を見ても、発行部数については記されておらず不明の状態である。

奥付・表紙の記載によれば、創刊号から第2巻第3号(1942年3月号)までは、当月の15日に「印刷納本」、20日に「発行」となっている。しかし、第2巻第4号(同年4月号)以降では、それぞれ7日と11日に変更された。

誌代については1部20銭という「犠牲的な廉価」であり、それは終刊号まで変わっていない<sup>4)</sup>。『国民保育』誌の創刊号と同年月に発行された他誌は、ページ数の違いなどを無視すれば、『幼児の保育』誌(第41巻第1号)が35銭、『保育』誌(第45号)が25銭となっており、『愛育』誌(第7巻第1号)の15銭(送料込み)よりは若干高いものの、確かに「廉価」ではあった。また、1942(昭

和17)年1月号(第2巻第1号)の巻末記事で、「創刊以来既に一年間、本誌は保育界向上のための一念から、全国の幼稚園託児所へ、購読申込みのない方へも本誌をお贈りして来ましたが、今後は出版新体制に即応するために、本誌四月号からは、購読を申込みの方だけに発送いたすことになりました」と記されていることから、最初の1年あまりの時期には無料配布もなされていたようである<sup>5)</sup>。そのような「犠牲的な廉価」となる誌代設定、そして無料配布といった対応には、他誌への対抗意識を垣間見ることができよう。

一方、判型はほぼA5版に相当する大きさであり、終刊号まで変化はない。しかし、ページ数(口絵写真や目次を除く)に関しては変動が見られる。1941年8月号(第1巻第8号)の96ページ、同年12月号(同巻第12号)から1942年2月号(第2巻第2号)まで3号分の68ページを例外とすれば、創刊号から1942年12月号(同巻第12号)までは64ページの厚さである。その後、1943年1月号(第3巻第1号)及び同年2月号(同巻第2号)では48ページ、所蔵先不明の2号分を挟んで、同年5月号(同巻第5号)から終刊号(同巻第7号)までが32ページと、資材不足による用紙制限を受けてか、次第に薄いものへと変わっている。なお、創刊号の全64ページという体裁については、他誌と比較した場合、『幼児の教育』誌の全58ページ、『愛育』誌の52ページとあまり変わらず、『保育』誌の全114ページという厚さには及ばないものであった。

表紙絵は、巻(年次)ごとで同一のものが使用されている。第1巻と第2巻の画家は石井柏亭、第3巻は清水良雄である。裏表紙などの広告については、フレーベル館(日本保育館)が多くを占め、そこに日本教育画劇や科学生活社、トンボ鉛筆、日本油脂株式会社などの他企業も加わった。

### (2) 編輯団体・発行元

続いて、編輯団体・発行元である。発行所は、奥付の記載上、「国民保育協会」(1941年1月)、フレーベル館(同年2月～同年10月)、日本保育館(同年11月～1943年7月)と変わってはいるものの、同協会がフレーベル館(日本保育館)内に拠点を置き続け、発行者には前社長で会長の高市次郎の名義が一貫して使われ、編輯者も社員の金丸光であった点などから、実質的には同社の編輯・発行誌であったことがわかる。そのことは、『国民保育』誌の創刊時の編輯会議において、同じフレーベル館発行の『キンダーブック』で編輯顧問であった岸邊福雄(福叟)や倉橋惣三が全面協力をしている点にも表れている<sup>6)</sup>。

一方、同誌の編輯・発行を行っていた「国民保育協会」は、どのような団体であったのか。それについては、創刊号の表表紙裏面に「国民保育協会々則」が掲げられているだけで、その組織の具体的な状況を示す記事などは同

号に掲載されておらず、国民保育協会手技部「手技三つ」という記事が1941年5月号（第1巻第5号）に見られるものの、終刊号に至るまで活動状況は示されていない。また、前述したように、同協会に関する史料をフレーベル館は所有していないとのことであり、渡邊紫郎實編『フレーベル館七十年史』（前掲）や北林衛編『フレーベル館100年史』（フレーベル館、2008年）といった社史における記述も乏しい。さらに、管見による限り、同時期の他誌にも「国民保育協会」関連の記事は掲載されておらず、日本文化中央聯盟編『日本文化団体年鑑（昭和18年版）』（日本文化中央聯盟、1943年）にも名を連ねていない。ただし、「役員」に関しては、創刊号に巻頭論文を寄せている皆川治廣（東京市教育局長）が「会長」で、終刊号の社告「統合に際して」に名を連ねた高市慶雄（フレーベル館社長）が「理事長」であることは、後の号から確認できる<sup>7)</sup>。なお、同協会の「会則」については、次のようなものであった<sup>8)</sup>。

国民保育協会々則

- 第一条 本会ハ国民保育協会ト称ス  
 第二条 本会ノ事務所ハ当分東京市神田区神保町二丁目四番地株式会社フレーベル館内ニ置ク  
 第三条 本会ハ保育ニ関スル諸般ノ研究並ニ指導ヲナスヲ目的トス  
 第四条 本会ハ前条ノ目的ヲ達成スルタメ左ノ事業ヲ行フ  
 一、 保育講演会、講習会等ノ開催  
 二、 月刊雑誌「国民保育」ノ発刊  
 第五条 本会ノ会員タルモノハ幼稚園、託児所並ビニ保育ニ関スル団体ヲ以テ組織ス  
 第六条 本会ニ左ノ役員ヲ置ク  
 一、 会 長 一 名  
 二、 副会長 一 名  
 三、 顧 問 若 干 名  
 四、 参 与 若 干 名  
 五、 評議員 若 干 名  
 六、 理 事 若 干 名  
 七、 幹 事 若 干 名  
 八、 書 記 若 干 名  
 前項ノ役員ハ会長ノ指名ニヨル  
 第七条 本会ニ左ノ各研究部ヲ置ク  
 一、 教育部  
 二、 衛生部  
 三、 談話部  
 四、 遊戯部  
 五、 音楽部  
 六、 図画部  
 七、 手技部  
 八、 観察部

九、用品部

- 前項ノ各部ニ部長並ニ委員若干名ヲ置ク  
 第八条 本会ハ必要ニヨリ地方ニ支部ヲ置クコトアルベシ  
 第九条 本会ノ経費ハ特志家<sup>(ママ)</sup>ノ寄附並ニ其他ノ収入ニヨル  
 第十条 本会々員ニハ毎月雑誌「国民保育」ヲ寄贈ス

雑誌『国民保育』の発刊は、この「会則」第4条でも規定されているように、「保育講演会、講習会等ノ開催」と並んで、「保育ニ関スル諸般ノ研究並ニ指導ヲナス」という目的の達成をめざす「事業」の1つであった。しかし、同誌の創刊号では、巻頭言や編輯後記などの主要記事を見る限り、そのような事情に関する言及はなされていない。また、日本読書新聞社雑誌年鑑編集部編『雑誌年鑑（昭和16年版）』（日本読書新聞社、1941年）や東京堂年鑑編集部編『出版年鑑（昭和16年版）』（東京堂、1941年）にも、同誌の創刊事情に関する直接的な記述を見ることはできず、不明の部分が多い。

それらの状況と前述したような点から見て、「国民保育協会」の実体があったのかは疑わしい。しかし、同協会は、創刊号では「編輯者」及び「発行所」として、その後の巻号ではすべて「編輯者」として奥付に会の名前がしっかり示されており、「本誌購読継続希望の方へ」や「愛読者各位へ」、「熱烈なる支持に答へて」といった告知も協会の名義で同誌に何度か掲載されている。そうした意味では、「会則」が掲げたものに相当するような団体であったのかは別として、「国民保育協会」は、『国民保育』誌を編輯する組織として、終刊号発行時まで一応存在したことになる。

II. 雑誌『国民保育』の誌面に見られる内容的変遷

(1) 「保姆の教養雑誌」としての時期（1941年1月から同年7月まで）

次に、創刊から終刊に至るまでの誌面構成と主だった記事の論調をたどることで、『国民保育』誌の内容的変遷を示してみたい。ここでは、「はじめに」でも述べたように、巻頭言・巻頭論文・編輯後記など、各号での主張が集約された記事だと見なされる部分の論調へあえて焦点を絞ることにする。また、その変化を浮かびあがらせるためには、時期区分の導入は欠かせまい。しかし、対象とするのは雑誌であり、毎号で誌面の刷新なども少しずつ行われている。ここでは、編輯方針の転換や論調の移行といった点に重きを置いて、仮説的に4つの時期へと区分してみたい。

第1期は、1941年1月から同年7月までとなる。この期間は、全体的に見れば、保育の基本や躰、健康保育、幼児文化など、保育問題全般へと目を配った誌面づくり



がなされ、いわば「保姆の教養雑誌」を謳った時期である。

雑誌『国民保育』の創刊に関する事情は、前述の通り不明の部分が多い。「創刊の辞」の掲載や編輯後記における直接的な言及など、それを示すような記事が創刊号には見られず、岸邊福雄「倉橋教授の直諫。福叟の緘黙〔。〕編輯長の汗みどろの奮闘力戦」が創刊に向けた準備会議での一場面を紹介しているのみである。また、前述したように、フレーベル館は関連史料を所蔵しておらず、渡邊紫郎實編『フレーベル館七十年史』(前掲)にも、「保姆教養雑誌『国民保育』創刊 一冊20銭金丸光 編集を担当」などの記述しか見られない<sup>9)</sup>。

しかし、雑誌発行による保姆の教養向上や組織化は、講演会や講習会の開催とともに、「保育翼賛」を推し進める上で重要な取り組みとして認識されていた(「会則」第4条)。それについては、創刊号に掲載された「編輯者の言葉」でも、金丸は、『自ら進みつゝある者のみ人を導く権利がある』といはれる教育社会にあり乍ら、自らの肩に負はせられた任務の重大さをも思はず、専門の保育雑誌一つ真剣に読むのではなく、たゞ低俗な読物にしか目をさらさない人達に対しては一種の義憤をさへ感ずるではありませんか、「新しい世紀の首途に、『保育翼賛』の旗高らかに翳して、全国の保姆諸姉と共に颯爽と進軍してゆく『国民保育』の上に、祝福あれ」と述べている<sup>10)</sup>。

また、『国民保育』誌を編輯・発行した「国民保育協会」は、「本会ノ会員タルモノハ幼稚園、託児所並ビニ保育ニ関スル団体ヲ以テ組織ス」(「会則」第5条)との立場を取り、同誌の創刊号では、全国各地に保育会などの組織・団体を持つ幼稚園側だけでなく、未組織な状態にあった託児所側の保姆も起用し、手記・実践記録を掲載するなどの手立てにより、保育界全体の団結を進めようとした<sup>11)</sup>。その姿勢は、創刊号掲載の「予告」にも、「保育の第一線に健闘する六人の若き戦士を動員して、二月号には、帝都に於ける進歩的な、優秀な保姆の生活記録を掲げます」し、「一月に続く保育実践欄は一層鉄壁の陣容で固めると共に全誌面に澆冽鮮新、新体制下の保育翼賛誌としての面目を遺憾なく發揮します」という形で述べられている<sup>12)</sup>。さらに、そうした「保育翼賛」の呼びかけによる保姆の動員は、次のような「原稿募集」の記事にも示されていた<sup>13)</sup>。

原稿募集

**保姆の声**

真に叫ばずにはあられない、ひとりでの唇について出てくる言葉、それを率直に聞かせてほしい。一人々々の声は小さくとも、その声が合しては、社会をも動かす力となりませう。「幼稚園こゝに在り」を叫ぶ者は、私達保姆をおいて、他に誰がござらませう。自己中心の、個人的な主張でなく、真に保育翼賛の立場

から、社会に対して、父兄に対して、為政者に対して、その他私達の叫びはあらゆる方向に向つて放たるべきです。分量は四百字詰原稿紙三枚以内。

**保姆の体験手記**

日々の保育生活の中から取材したもので、読者に深い内面的感動を呼びかけるやうな記録を募集します。分量は四百字詰原稿紙七枚程度。

右、何れもメ切は毎月十日・掲載の分には稿料を呈す。

原稿送り先は、東京市神田区神保町二ノ四 フレーベル館内 国民保育編輯部〔。〕

そのような編輯者の金丸光による企図は、当然のことながら、創刊号の誌面構成にも具現化された。同号の目次については、次のようになっている<sup>14)</sup>。

『国民保育』第1巻第1号(1941年1月号)  
目次

表紙	石井柏亭〔絵〕
国民保育協会々則	
内扉	清水良雄〔絵〕
目次	石原玉吉〔絵〕
〔勅題〕漁村曙	野口雨情
皇太子殿下御写真	
〔巻頭言〕国民の就学前	倉橋惣三
無窮なるものへの帰一合流	皆川治廣
国家の保姆	宇田川与三郎
新体制下の幼児保育	霜田静志
倉橋教授の直諫。福叟の緘黙〔。〕編輯長の汗みどろの奮闘力戦	岸邊福雄
一月の躰	留岡よし子
一月の観察	坂内ミツ
こどもも翼賛	〔作詞〕西條八十・〔作曲〕梁田貞・〔振付〕土川五郎
初春集	長谷川愛子・丸川舞子・影山恵子・武山文子・田邊由紀・葉山あき子
〔童話〕ミドリのお人形	村岡花子
一月の手技	ト部たみ
一月の保育案	和田實
保姆さんに願ふ	櫻井忠武
私も願ふ	長谷健・寺下孝宗・木内キヤウ・太田彌三郎・小川未明
従軍画家のスケッチブックから	林唯一
先づ婦人をして子供を育てしめよ	沖野岩三郎
若き保姆は斯く希ふ	西村真佐子
私も希ふ	海卓子・柴田みどり・秋田美子
働く母とその子達	塩谷アイ

シヨツク	山村きよ
〔板画童話〕かしこい雞	栗原登
母と子供の問題	平野婦美子
ニヤーニヤーの絵を見てから	持丸輔夫
幼児心理学	山下俊郎
黒板略画は斯う描く	武井武雄
強い子供に	広瀬興
原稿募集	
編輯者の言葉	金丸光
裏表紙	〔フレーベル館『キンダーブック』の広告〕

この目次に示された構成は、大まかに分けると6つの部分で形づくられている。すなわち、1) 巻頭言を含む有識者らの論説、2) 毎月の保育教材、3) 作家・画家らの随筆など、4) 保姆の手記・実践記録、5) 保育教養講座、6) その他(口絵写真や詩歌など)であり、こうした枠組みは後の号にも受け継がれていくこととなる。これらの中で、巻頭言を含む有識者らの論説と保姆の手記・実践記録に関しては、各号の特輯と連動する内容のものが基本的に載せられている。7月号までの特輯については、「保姆の生活記録」(第1巻第2号)と「幼児童話躍進号」(同巻第3号)、「躰の新体制号」(同巻第4号)、「幼児文化の建設号」(同巻第6号)となっており、その他の号では特輯が謳われていない(ただし、第1巻第5号は「健康保育号」とでもいべき内容である)。また、「幼児童話」や「幼児文化」に力が入れたのは、口演童話家として名をはせ、東洋幼稚園の園長として幼児教育に造詣が深い岸邊福雄が編輯顧問を務めていた関係からであり、童話の掲載は後の号にも続けられた。さらに、保育教養講座枠の「保育道場」は、幼児心理学や描画、保健、音感教育をテーマとして第1巻第8号まで長期掲載されている。

こうした多様な内容であったため、執筆者の職種や所属先なども多岐にわたっている。具体的には、保育関係者や学者、教師、作家・画家、児童文学者などの文化人に加え、軍人の寄稿も見られ、保姆については幼稚園・託児所双方の顔触れがある。「日本幼稚園協会」や「愛育会」、「保育問題研究会」など、その所属団体もまちまちであり、多方面の人材が誌面を賑わしている。

同誌の創刊前夜となる1940年頃には、自由な言論・文化活動が消滅していく一方で、「国家総動員」の一環として文化人や文化団体の活動が懲罰され、各方面で「翼賛文化運動」も開始されていた<sup>15)</sup>。とりわけ「児童文化」をめぐっては、1941年12月23日創立の「社団法人日本少国民文化協会」へとつながる動きが活発化していた時期でもある<sup>16)</sup>。『国民保育』誌への文化人の参加は、そうした背景のもとで行われたものであり、その編輯・発行は、保育界のみならず、「翼賛文化運動」にも軸足を置くものだったと見なすことができる。

そして、執筆者が多彩であれば、当然のことながら論

調における立ち位置も異なっよう。この時期の特徴としては、そうした主義・主張の違う者同士が並び、誌面全体での一体性が図られていないところにある。例えば、創刊号では、「児童中心主義」思想に基づき、当時の保育界に影響力を持っていた倉橋惣三や和田實の論稿が掲載される一方<sup>17)</sup>、東京市教育局長で「国民保育協会」会長も務める皆川治廣が、巻頭論文において、「皇紀二千六百一年の劈頭に於て切に保姆諸氏に希ふ第一義」として、「祖先を敬ふものは君を敬ひ、神を敬ふこと、なり、又同時に祖先の家を愛し、君の国を愛し、神の国を愛する気分が沸き起ると共に後世子孫を愛護する心情も亦自らにして沸き出てくること」の意義を説き、「日本精神」論を展開している<sup>18)</sup>。とはいえ、そうした対峙は時折見られるものの、誌面全体としては、実践の充実を謳う保育関係者の論調が主流派となり、保姆の教養を高める内容が形づくられていた。

また、この時期の誌面構成では、『愛育』誌に対抗してか、皇室関係者の口絵写真を掲載していることも大きな特徴となろう。創刊号では、「皇太子殿下御写真」が目次と巻頭言の間に掲げられており、次号以降は、「義宮殿下御写真」(第1巻第2号)及び「照宮成子内親王殿下御写真」(同巻第3号)、「孝宮和子内親王御写真」(同巻第4号)、「順宮厚子内親王殿下御写真」(同巻第5号)、「清宮貴子内親王殿下御写真」(同巻第6号)というように、半年間の掲載が続く。それ以後は、保育現場の写真などへと切り替えられている。

さらに、皇室との関係では、詩歌の掲載も注目すべきものとなろう。創刊号では、「漁村曙」(野口雨情)と「〔短歌〕初春集」(長谷川愛子・丸川舞子・影山恵子・武山文子・田邊由紀・葉山あき子)が載せられており、野口「漁村曙」は、1941年の歌会始における勅題であった。それ以後も、詩や短歌の掲載は時折行われ、野口をはじめとして、与謝野晶子や杉浦翠子、若山喜志子、竹内てるよ、白鳥省吾、高橋たか子らの作品が各号の表紙裏面や目次裏面などに載せられている。

## (2) 「国策保育雑誌」としての時期(1941年8月から1942年4月まで)

第2期は、1941年8月から1942年4月までとなる。この期間は、アジア・太平洋戦争の開戦を挟んでおり、戦時用語などを積極的に取り入れた特輯を組み、前の時期における誌面構成を崩して、「国策保育雑誌」としての地位を積極的にアピールした時期である。

まず、特輯については、総力戦体制に与する形で、「高度国防国家建設号」(第1巻第8号)と「母性教育号」(同巻第9号)、「保育の臨戦体制号」(同巻第10号)、「戦時特輯」(第2巻第1号)、「皇道保育号」(同巻第2号)と銘打っている。特輯に基づく誌面づくりは第1期を踏襲しているものの、総花的な枠や欄の配置は抑えられている。具体的には、第1巻第8号を以て保育教養講座枠

「保育道場」が連載終了となり、それ以降の構成は、巻頭言を含む有識者らの論説、毎月の保育教材、作家・画家らの随筆、保姆の手記・実践記録という形に変わった。巻頭言は保育関係者から無署名のものへと移行し、載せられていない場合もある。また、執筆者の数自体が減り、保育研究者と入れ替わりに、軍関係者や婦人運動家の寄稿も目立つようになっている。さらに、童話などの掲載も次第に減少し、その空白を詩歌が埋めた。

そうした編輯方針転換の背景には、何があったのか。雑誌をめぐる「混沌状態に対して先づ打つべき手は統合改廃であらう」として、1941年には、「東京府下に対して警視庁が当り、文協〔日本出版文化協会〕が活動を開始した六月末からは、情報局を中心に、内務省、警視庁〔〕文協ならびに当該雑誌の関係官庁の協議決定に基づき、新聞紙法による雑誌は警視庁で、出版法によるものは主として内務省で、また自発的乃至個別的統合のものは文協でこれを処理する」動きが進められており、「用紙は思想戦の弾丸であるといふ観念」も出版業界に広がりつつあった<sup>19)</sup>。こうして雑誌統合が進められる中で、雑誌『国民保育』は、次の「御挨拶」が示すように、「統合改廃」を甘受するのではなく、当局の意向に適う誌面づくりを行うこと<sup>20)</sup>、「思想戦」の弾丸として生き延びる道を志向したのである<sup>21)</sup>。

#### 御挨拶

緊迫せる情勢下、保育の臨戦体制確立の要望せらるゝ折柄、政府当局は諸雑誌の規正統合に乗り出され、民間の教育雑誌百五十種は二十九種に廃合々併せられし事、新聞紙上に瞥見せられた通りである。本誌は幸にして其の価値を認められ、唯一の国策保育雑誌として存続を許されたので、引き続き親愛なる諸姉と相見ゆるを得る事となつた。

戦時に於ける人的資源の培養強化が物的資源のそれにもまして重要な事は茲に喋々を要しない。政府当局に於けられても、厚生省に人口局を新設し、また情報局が中心となつて少国民文化協会の誕生を見んとする等、其の施設に万全を期せらんとする跡が伺はれる。唯一の国策保育雑誌として一層公的性質を加へ来つた本誌は、今後政府御当局の指示を仰ぎ、臨戦体制下に於ける保育機関の指導雑誌として万遺憾なき内容を盛り、以て保育報国の誠を致し度き念願である。万民総力を挙げて国家に奉仕すべき折柄、畏くも、陛下の「おほみたから」を御預り申上げて其の保育の任に当る者の重責を想ひ、真に敬虔の念を以て本誌の編輯に当らん事を誓ふものである。大方の御指導御協力を熱願して能まぬ次第である。

右簡単乍ら御挨拶迄。

それに伴う論調の変化は、1941年8月、「高度国防国家建設号」の発行が皮切りとなった。その号には座談会「総力戦下保育者の使命を語る」が掲載されており、実践の充実を訴えてきた保育関係者が、そこでは矢面に立たされている。陸軍中尉で「国民保育協会」理事の稲垣清らが「保育の革新」論を主張したことに対し、「お話しに御尤と思ひますけれども、又保育者は保育者の立場があるといふことを一言申し上げざるを得ないと思ふのでございます」（高崎能樹）や「幼児教育にかういふ風な教育をもつとしろといふやうなことで、色々御註文のあつたことはその儘お受けするといふことは、私共のやうな指導者の位置に立つ者には一寸受取りにくい」（和田實）、「実際若い保姆諸君はそれぞれ苦勞を致して居りますので、これはこの雑誌に依つてお説を承ります人達に代りまして、お察しを戴いて置きたいと思ふのであります」（倉橋惣三）などと、保育関係者は必死に反論を重ねた<sup>22)</sup>。しかし、そうした両者の溝は埋まらず、座談会への出席以後、保育界の重鎮であつた倉橋や和田の名前は『国民保育』誌に見られなくなり、かつて主流派であつた論調も姿を消してしまう。

そして、その流れは、「皇道保育」特輯での巻頭言「皇道保育宣言」などが象徴するように、保育界を風靡してきた旧来の思想に対し、徹底的な批判を加える方向へと向かつた。すなわち、「嘗て我が国の教育界に於ては、個人主義、自由主義の立場から、国家意識を没却して世界主義的無国籍ユダヤ的な哲学を本とした教育学が横行し、ために正しい国家観念を被教育者に与へることが出来ず、皇国民としての錬成にも欠くる所が多かつた」ため、「さうした時代にうけた誤れる教養を、保育者は真摯に反省し、真に国体信念に徹し、皇国民としての健全なる人生観を基礎として、日々の保育を實踐しなければならぬ」と謳い、保姆に求める教養の基盤を「皇道」への邁進だとしたのである<sup>23)</sup>。

その結果、「かつて自由主義の大本山だといはれ欧米思想の植民地だといふなされた幼稚園、赤い思想の温床ではないかと疑はれた保育所一だが、それは昔のことです」し、「時代は今や、深刻な思想戦の段階に入りました」ので、「本誌の編輯も、かうした情勢に対して鉄壁の陣容を堅めねばなりません」とされ、「思想戦」に応えるような保姆の手記・実践記録が誌面を占めはじめることともなる<sup>24)</sup>。そうした形で保育者の自己犠牲的献身をも煽りながら、雑誌『国民保育』はプロパガンダ誌としての性格を強めたのである。

#### (3) 「母と先生の雑誌」としての時期（1942年5月から1943年1月まで）

第3期は、1942年5月から1943年1月までとなる。この期間は、「母と先生の雑誌」として、対象読者を保姆だけでなく母親にも広げ、両者の協力による保育・子育ての抜本的刷新を強調するような誌面づくりがなされた



時期である。

1942年4月、第2巻第4号の編輯後記において、編輯者の金丸光は、「母の心をわが心として保姆も亦挺身する時、日本の幼児教育の本道は確立せられるのです」と述べ、「本誌は今後、戦時幼児教育の根本的刷新への母と保姆の協力を強調した編輯を進めて行きたいと思ひます」と記していた<sup>25)</sup>。また、「出版新体制」に呼応するため、同号から購読希望の申し込みをした者だけに、『国民保育』誌は頒布されるようにも改めている。

そうした編輯方針の転換を受け、翌5月、同巻第5号から表紙で「母と先生の雑誌」と謳われるようになり、保姆向けから母親も読者に想定した雑誌へと路線変更がなされた。それに伴い、誌面構成の枠組みに手が加えられ、有識者や作家らの論説・随筆に続いて、「皇民錬成育児講座」や「幼稚園と家庭連絡帖」、「特別講座」といった枠が連ねられるようになっていく。「皇民錬成育児講座」は当該月の保育教材を扱ってきた枠、「幼稚園と家庭連絡帖」は保姆の手記・実践記録を載せてきた枠を変更したものであり、後者は母親の手記も掲載されるような形へと変わった。また、「特別講座」という形がかつての保育教養講座枠を復活させ、誌上講義の連載も再びはじめられている。さらに、論説・随筆の執筆者は以前よりも女性が増えており、誌面では「母」の文字が躍るようになった。

そのような再度の編輯方針の変更がなされた背景には、いったい何があったのだろうか。1942年5月、文部次官通牒「戦時家庭教育指導二関スル件」（発社128号）が各地方長官宛に出され、「戦時家庭教育指導要項」も発表されており、その前後の時期には、戦意高揚、戦時下生活の刷新、銃後の務めを担う母親の自覚向上のため、各施設で「母の会」の組織化も図られることとなっていた。『国民保育』誌も、先の編輯後記の横に掲載された「急告」で、「今迄本誌を園児のお母さんに借して読ませてゐた方で今後お母さんにも一冊づつ、買つて読ませたいといふ方が最近激増しました」と述べるなど、母の会で活用できるように誌面づくりへと切り替え、そうした要請に応えたのである<sup>26)</sup>。

一方、主要記事の論調はどうなったのか。端的に言えば、編輯方針を転換しつつも、これまでの立場をほとんど崩してはいない。特輯を組まず、「葉隠」や「軍神の母」、「錬成」などの話題を小枠のテーマとして取りあげながら、「国体」や「日本精神」、「母性」をより一層強調するような誌面がくり返されていった。そうした点について、金丸光は、「かつて本誌が止むに止まれぬ熱情から、幼児教育界に溺蔓してゐる米英主義を痛烈に指摘排撃した時、それでは反感を買つて雑誌が困るだらうと心配して下さつた方もありましたが、私達は、たとへどんな窮地に陥らうとも正しい主張は必ず徹す熱意をもちつゝけて来ました」し、「多難な幼児教育界を思ひ、その荊の道を切りひらかねばならぬ本誌の使命を考へる

時、挺身あるのみです」と述べている<sup>27)</sup>。また、彼は、後の編輯後記でも、「紙は弾丸である」と冒頭に記した上、「このことばを思ふにつけ、一頁たりともあだやおろそかには使へなくなります」し、「戦へる国の現情は、編輯者に対して、更に厳粛な自覚を促して居ります」と述べる一方、「保育雑誌が皆営利を離れひたすらなる保育愛の精神のために発行されてゐる」状況下であって、「雑誌のどの一頁にも編輯者の止むに止まれぬ愛国と、保育への情熱とが、しらべ高くにじみ出さねばならぬ」と主張し、時局の要請に適う誌面づくりへと邁進していることを強くアピールした<sup>28)</sup>。

#### (4) 再び「保姆の教養雑誌」としての時期（1943年2月から同年7月まで）

第4期は、1943年2月から同年7月までとなる。この期間は、所蔵先不明の2号を含んでおり、未確認の部分が少なからずある。しかし、わかっている範囲の誌面をとらえれば、表紙から「母と先生の雑誌」という文言を外し、再度「保姆の教養雑誌」を志向して、戦時保育の諸問題を扱う形で、特輯を改めて組むようになった時期として括ることができる。

その当時、すでに戦局は悪化し、国民生活に陰りが見えはじめており、銃後を支える女子の挺身が叫ばれ、農繁期託児所や隣組保育への対応などで、保育界にもわかに活気づいていた。編輯者の金丸光は、1943年2月、第3巻第2号の「編輯歳事記」で、「溺れる子供を救つて、自らは深淵の底深く、死の教育挺身をなされた国民学校の女教師の話ははなばなしく新聞にも雑誌にも報道されますが、貧しい保育所の中で、暴れ廻る子供たちの舞い上げる濛々たる塵埃の中に、日くる、まで青春と健康とを捧げつくしてゐる保姆にとつては、その一日々々の生活が捨身であり、挺身そのものであります」し、「しかもそれに対しての社会の関心のうすさが今日の幼児教育の立ちおくれとなつてゐることを思ふとき、私たちはもつともつと今後は、社会へのはたらきかけが必要だと思ひます」と記している<sup>29)</sup>。そのような「社会へのはたらきかけが必要だ」との思いは、特輯を復活させ、「母子寮特輯」（第3巻第2号）や「季節保育所号」（同巻第5号）、「隣組保育特輯」（同巻第6号）、「保育者総力結集号」（同巻第7号）を送り出していく形となった。なお、前述した「編輯歳事記」の末尾で、「来月は、国民学校と幼稚園、家庭の聯絡についての特輯号をお送りいたします」と予告されており、未見の同巻第3号は、そのテーマの特輯号になったものと推測される<sup>30)</sup>。また、同じく未確認の同巻第4号についても、これらの流れから何らかの特輯を組んでいた可能性が高い。

そうした『国民保育』誌の末期における論調は、端的に言えば、保姆や母の献身的な取り組みによって、現在の苦しい状況をいかに乗り切るのかという方向へ流れていった。具体的には、そのための心得や方策が説かれる

一方、未だ国民の認識が低い乳幼児保育や母子保護の役割を改めて訴え、それを社会的に喚起していこうとする主張もなされている。また、誌面については、前の時期における基本的な路線を引き継ぎつつも、有識者の論文・随筆や保姆の手記・実践記録、保育教材など、初期の構成をコンパクトにしたものへと戻された。さらに、しばらく寄稿のなかった「保育問題研究会」会員らが再登板するなど、執筆者には各方面から多彩な顔触れを並べているものの、全体のページ数が減った関係から、各論稿の紙幅は少なく、内容も簡潔になっている。加えて、保育案の掲載も裏表紙の裏面で復活し、保育雑誌らしさを取り戻した。

しかし、そのような誌面づくりの努力もむなしく、1943年7月、雑誌『国民保育』は第3巻第7号を以て終刊してしまう<sup>31)</sup>。発行期間2年7ヵ月、通巻31号のことであった。

## おわりに

以上、本稿では、雑誌『国民保育』の書誌を整理する一方、創刊号から終刊号までの誌面構成や主だった論調の変化をたどることで、同誌の姿を素描してみた。最後に、その後の経過として、終刊・統合をめぐる事情に触れることで、全体のまとめに代えたい。

前述したように、1943年7月、『国民保育』誌は「時代の要請」にしたがって終刊し、「全日本保育聯盟」発行の『保育』誌と統合されることになった。終刊号には、巻末に見開きで告知文「統合に際して」が掲載されており、次のように経緯が説明されている<sup>32)</sup>。

### 統合に際して

国民保育協会理事長 高市慶雄  
全日本保育聯盟理事長 西村真琴

時局は逐日重大性を加へ、国民の気構へは愈々決戦体制をあらゆる方面に堅持してゐます。

今回月刊「国民保育」と「保育」の両誌が統合を執行するに至りました事は、時代の要請に対応する責任者間の誠意と断正の致すところと御諒承を願ひます。即ち目的を同じくし、或は類似なるが故を以て予て両誌統合の合理性を認めて議をねつた事實は既に久しき以前に遡りますが、最近漸く出版用紙の配給量に制限を受けつゝあるに拘らず、依然旧来の慣性に終始するがため、之を讀者の立場よりすれば一抹の寂寞を感じ、之を編輯の上からは誠に隔靴搔痒の怨みを免がれざる次第であります。されば現段階に於ける我等幼児教育の任を負へる者の態度の正否を反省し、爰に両誌の統合を実現するに至りました。従つて八月号より「国民保育」の伝統は「保育」誌上に盛られること、

なりますから・両誌の愛読者各位は、従前の関係を「保育」に継がれます様御願ひ申し上げます。又「保育」は此の際一層内容の充実を期し、統合強化の実をあぐることに精励致して、一は以て出版界指導の理念に應へ、他は皇国保育の正鵠を失はざる様協力尽瘁を惜まざるものであります。

統合を執行するに当り、右の意図を謹告して大方諸賢各位の御諒認を希ふ次第であります。

### 附記

「国民保育」誌前金払込講読のお方で、残金のおありの方に対し、今後「保育」誌をお送り申し上げ〔、〕なほ右両誌を現在御購読のお方は「保育」の購読期間延長等の方法を以て、決済に充て度く存じて居ります。右情状御酌量の上重々御諒承の程御願ひ上げます。尚右にて御都合悪しきお方は当方迄御申出で下さい。

終刊号は、前述したように、奇しくも「保育者総力結集号」と題されており、団結や協力といった結びつきが謳われる内容であった。そのため、最後の編輯後記でも、「色々な事情のため、二つの雑誌が一つに減らうとも、断じて、私達の保育者としての熱情はさめるものではありません」し、「進むべき道はたゞ一つ」、「保育界のために挺身するのみ」だとして、「そのためには更に、新たなる構想のもとに、邁進したいと思ひます」と述べられている<sup>33)</sup>。

一方、統合先の『保育』誌においては、その事情がどう説明されていたのか。同誌の第75号（1943年7月号）では、前掲した告知文「統合に際して」と同じものを目次裏面に掲載し、次のように編輯後記で述べている。

「◇共同声明にもあります通りに愈々八月号より『国民保育』誌を『保育』が統合することになりました。これで本誌の使命が一段と重く内容の充実を計り、両誌の意のある遜色なき雑誌にしたいものと編輯子は今から頑張つて居ります。両誌の読者諸賢は絶大なる御指導を贈りますやうに願ひ致して居ります。」<sup>34)</sup>

そして、翌8月、『保育』誌の第76号が統合初号として発行され、『国民保育』誌は完全に姿を消す。同号表紙の誌名上部には「『国民保育』統合」と小さく記され、目次にも「『保育』八月（統合記念）号（第七十六号）」と書かれている。また、編輯後記でも、次のような形で両誌統合に触れ、『国民保育』誌の旧読者を迎えるコメントが載せられた。

「◇…表紙にも既に明記されてある通り、今月号より本誌は『国民保育』誌を統合して新しい前途の記念すべき本号を皆様にお送り致します。今更その



統合すべき因由を云々するまでもなく、必然に来る可きものに対して私達が新しい決意と公なる出版報国への一つの顕現であると云ふより外はないのです。／◇…果して予告にも明示してゐる通りに、本誌の重大なる使命と云ふものが、一つの予測ではなしに現実的な歩みを出発した訳であります。故に本号は色々な立場より検討して頂く可く、盛り沢山の構想の一端をばお送りすることになった。／◇…新しい本誌の読者になつて下さいました『国民保育』誌の皆様には、今後本誌の目的が那邊にあり、如何なる体系の意図の下に指導性ある本誌が編まれて行くかを、最初に受取り下さいました折にお感じになつたことと存じます。願はくば『国民保育』誌同様に本誌への御支援を切に願ふ次第であります。』<sup>35)</sup>

さらに、「統合記念」を銘打った雑誌『保育』第76号では、特輯も組まれ、長田新「大和の精神と日本文化」と小林澄兄「国民文化と婦人の力」の2本が掲載された。長田は、その論文の冒頭と末尾で、両誌の統合について、次のように言及している。

「全日本の保育に魂の糧を貢いで日本文化の根元に深く培ふことを使命として来た全日本保育聯盟の機関誌『保育』は、同じ理想の実現に相携へて戦つて来た雑誌『国民保育』を統合して、今や捲土重來の勢を以て真に全日本の保育を指導号令することになった。独り雑誌だけではなくて文化のあらゆる分野に亘つて統合は我が国歴史の転換期を象徴する、一大指標であるかの如くである。思へば大東亜の建設そのものが共栄圏といふ言葉が既に暗示してゐるやうに大東亜諸民族の一大統合であるとも言ふことが出来る。さう考へて統合は何の思ひつきでもなければまた偶然の出来事でもなく何の便宜主義の仕業でもなければまた機械的の企図でもなくて、吾が国運の世界史的発展から来る本質的な必然と言はなくてはならない。』<sup>36)</sup>

「〔外来のものを包容・同化してきた〕大和の精神こそは日本文化創造の大本と言つていい。而も雑誌『保育』が『国民保育』を統合したのも、……大和の精神に発する融合合体であるとすれば、そこには必然に新たなものが創造されなくてはならない。『国民保育』を統合した『保育』にかける吾等の期待は、単にそれが、文字通り全日本保育聯盟の機関誌たるの貫禄を示すだけでなく、日新日日新又日新と湯の盤の銘にもあるやうに、日に新たなるべき保育の道の指針たるどころにあると思ふ。』<sup>37)</sup>

なお、そうした『保育』誌も、その1年半後の1945(昭和20)年2月には第94号を以て休刊してしまう。しか

し、翌1946年5月に同誌は版元を変えて復刊し、1974(昭和49)年3月、第29巻第3号まで刊行されることとなる<sup>38)</sup>。

#### 〔注〕

- 1) 日本保育学会『幼児保育史(第4巻)』フレーベル館、1971年、同『幼児保育史(第5巻)』同前、1974年など。
- 2) 拙稿「太平洋戦争開戦前夜における戸越保育所——『国民保育』誌と『本邦保育施設に関する調査』に見る保育状況」(『人間教育の探究(日本ペスタロッチー・フレーベル学会紀要)』第23号、2011年)、同「保育問題研究会による保育案研究——機関誌『保育問題研究』から雑誌『国民保育』への発表媒体の移行を踏まえて」(『幼児教育史研究』幼児教育史学会、第7号、2012年)。
- 3) 加藤陽子「〈文庫化に寄せて〉女性を変える、女性が変わる」(上野千鶴子『[対談集] ニッポンが変わる、女が変わる』中公文庫、2016年、p.170)。
- 4) 国民保育協会「本誌購読継続希望の方へ」(『国民保育』日本保育館、第2巻第1号、1942年1月、裏表紙裏面)。
- 5) 同上。
- 6) 岸辺福雄「倉橋教授の直諫。福叟の緘黙〔。〕編輯長の汗みどろの奮闘力戦」(『国民保育』国民保育協会、第1巻第1号、1941年1月)、金丸光「編輯者の言葉」(同前)。
- 7) 皆川治廣「我等の祖先」(『国民保育』第1巻第12号、1941年12月、p.5)、高市慶雄・西村真琴「統合に際して」(『国民保育』第3巻第7号、1943年7月、p.30)。
- 8) 「国民保育協会々則」(『国民保育』第1巻第1号、表表紙裏面)。
- 9) 渡邊紫郎實編『フレーベル館七十年史』フレーベル館、1977年、p.46、p.110。
- 10) 金丸光「編輯者の言葉」(『国民保育』第1巻第1号、裏表紙裏面)。
- 11) 「国民保育協会々則」(前掲)。
- 12) 〔無署名〕「予告」(『国民保育』第1巻第1号、p.50)。なお、「保育問題研究会」も、『国民保育』誌の創刊と同じ1941年1月、機関誌に巻頭言「保育翼賛の道」を掲げ、「新体制」運動へと与する姿勢を明らかにしていた(〔無署名〕「保育翼賛の道」(『保育問題研究』保育問題研究会、第5巻第1号、1941年1月、p.1))。
- 13) 〔無署名〕「原稿募集」(『国民保育』第1巻第1号、p.64)。
- 14) 「目次」(『国民保育』第1巻第1号、pp.2-3)。なお、本文での記載と照らし合わせ、原則として、そちらの表記の方を採用した。
- 15) その点について詳しくは、北河賢三「解説」(同編『資料集 総力戦と文化 第1巻 大政翼賛会文化部と翼賛文化運動』大月書店、2000年)などを参照のこと。

- 16) その点について詳しくは、浅岡靖央『児童文化とは何であったか』(つなん出版、2004年)などを参照のこと。
- 17) 倉橋惣三「〔巻頭言〕国民の就学前」(『国民保育』第1巻第1号)、和田實「一月の保育案」(同前)。
- 18) 皆川治廣「無窮なるものへの帰一合流」(『国民保育』第1巻第1号、p.7)。
- 19) 協同出版社編集部編『雑誌年鑑(昭和十七年)』協同出版社、1942年、pp.6-7(〔……〕は引用者、以下同様)。
- 20) 〔無署名〕「〔巻頭言〕御挨拶」(『国民保育』第1巻第10号、1941年10月、表表紙裏面)。
- 21) 金丸光「思想戦と保育者——編輯者の言葉」(『国民保育』第1巻第11号、裏表紙裏面)。
- 22) 井上司朗・稲垣清・小田倉一・大宅由耿・中村武次・宇田川与三郎・伏見猛彌・佐藤義美・清水虎雄・和田實・高崎能樹・倉橋惣三・岸邊福雄・檜山京子・望月クニ・徳永恕子「〔座談会〕総力戦下保育者の使命を語る」(『国民保育』第1巻第8号、1941年8月、p.27、p.35、p.45)。
- 23) 〔無署名〕「〔巻頭言〕皇道保育宣言」(『国民保育』第2巻第2号、1942年2月、表表紙裏面)。
- 24) 金丸光「思想戦と保育者——編輯者の言葉」(前掲)。
- 25) 金丸光「特別攻撃隊(軍神の母を偲びて)——編輯後記」(『国民保育』第2巻第4号、1942年4月、裏表紙裏面)。
- 26) 〔無署名〕「急告」(『国民保育』第2巻第4号、裏表紙裏面)。
- 27) 金丸光「空襲下の編輯室にて」(『国民保育』第2巻第5号、1942年5月、裏表紙裏面)。
- 28) 金丸光「戦ひの中の編輯者」(『国民保育』第3巻第1号、1943年1月、裏表紙裏面)。
- 29) 金丸光「編輯歳事記」(『国民保育』第3巻第2号、1943年2月、裏表紙裏面)。
- 30) 同上。
- 31) 雑誌『国民保育』の終刊号は、次のような目次となっていた(『国民保育』第3巻第7号、表表紙裏面、なお、本文での記載と照らし合わせ、原則として、そちらの表記の方を採用した)。

『国民保育』第3巻第7号(1943年7月号)	
目次	
表紙	清水良雄〔絵〕
目次	
内扉	〔画家不詳〕
幼稚園の全国的聯盟結成へ	東京都私立幼稚園協会
全国の保姆よ手をつなげ	中林孝子
京城愛国幼稚園を観る	堀江千恵子

京都の保育界を綴る	高橋良和
宮城県の保育	竹林誠一郎
熊本県に於ける保育界の現状	葛谷隆正
保育寸言	須古啓子・一甲絹子・廣岩則子・川田百合子・福井尚子・永田文江・山村きよ・平澤恭子・日野東子
疫痢に似た幼児の病気	杉田つる
胡瓜やトマトの幼児向栄養食	正木富貴子
〔舞踊〕いなご	賀來琢磨
ねずみの角力(幼児話材)	原勝
夏の手技	卜部たみ
〔創作〕屋上の影絵(母の手紙ノ一)	松田解子
統合に際して	高市慶雄・西村真琴
編輯者の言葉	金丸光
幼稚園・保育所年中行事一覧表	内山憲尚
裏表紙	〔日本保育館『ミクニノコドモ』の広告〕

- 32) 高市・西村「統合に際して」(前掲、pp.30-31(太字原文))。なお、同じ告知文は統合先である『保育』誌の側にも掲載されており、そこでは高市慶雄の肩書きが「日本保育館社長」となっている(『保育』全日本保育聯盟・保育発行所、第75号、1943年7月、目次裏面)。
- 33) 金丸光「編輯者の言葉」(『国民保育』第3巻第7号、p.32)。
- 34) 増田義雄「あとがき」(『保育』第75号、p.58)。
- 35) 増田義雄「あとがき」(『保育』第76号、1943年8月、p.72)。
- 36) 長田新「大和の精神と日本文化」(『保育』第76号、p.2)。
- 37) 同上、p.6。
- 38) そうした経緯については、湯川嘉津美「解説」(全日本保育連盟編・湯川嘉津美解説『復刻版「保育」戦後編I——1946-1955(第15巻)』日本図書センター、2015年)などに詳しい。

※ 本稿は、「平成26年度科学研究費助成事業(学術研究助成基金助成金(基盤研究(C)))」(タイトル:「総力戦体制下の保育雑誌に見る『国民保育』論の生成と展開——『国民保育』誌を中心に」、課題番号:26381105)による研究成果の一部である。

## On the Bibliographic Data and Changes to Editorial Policy in the Monthly Magazine *Kokumin Hoiku*: 1941-1943

Toshikazu ASANO

**Abstract** : The purpose of this paper is to present the content of the monthly magazine *Kokumin hoiku*, published in the early 1940s, by examining the bibliographic data and changes to editorial policy. The magazine transitioned through roughly four phases. From January 1941 to July 1941, *Kokumin Hoiku* was a cultural magazine for kindergarten teachers. During the second period, August 1941 to April 1942, it evolved into a propaganda magazine for early childhood education. From May 1942 to January 1943, the magazine targeted mothers and kindergarten teachers. In the fourth period, February 1943 to July 1943, the magazine returned to being a cultural magazine for kindergarten teachers.

**Keywords** : Kokumin Hoiku-kyoukai, Fröbel-kan (Nohon Hoiku-kan), All-out war